

「おねしよが治らない…」

カイロプラクティックオフィスアイダ

院長 会 田 成 臣



【患者】

小学校二年生（八歳）。

男の子。

過去に大きな病歴や怪我はなし。

前回治療の二度の切り替え後、言語神経反射で反応があり三度目の切り替えをする。

【治療】

《3度目の切り替え》

これにはセルフイメージが関係していた。

本人は症状のことを長期に渡りかなり気にしていたので、無意識の領域にまで症状のイメージが落とし込まれ、脳が症状を学習記憶していても不思議ではない。

さらに、年齢が高くなるに伴い様々な感情も発達し、やってしまったことを母親にも隠していたようなので、症状や自分、周りに対する感情が学習を強化することに繋がっていたと考える。

今回は本人が認識しないようにセルフイメージを切り替えなくてはならなかったので、母親に協力してもらい代理のイメージで検査を行った。

母親が子どもに接触した状態で、母親におねしよをしてしまった息子と、症状が治った息子の姿をイメージしてもらい検査

を行う。

検査の結果上手く反応が切り替わったので、そのイメージで子どもに治療を行った。

その後、言語神経反射にて症状の確認を行うが、緊張反応が消えていたのここで治療は終了となった。

【治療結果】

治療から一週間後に電話を頂き、あれ以来おねしよをしなくなったとの報告を頂いた。

そして、二カ月経った現在も一度もすることがないとのことなので、セルフイメージによる学習記憶も上手く切り替わっていると考ええる。

【考察】

今回の症例のポイント、母親の症状が先に改善したことにより、おそらくその影響も受けていた子どもが敏感に母親の変化をキャッチし緊張から解放されたということ。母親と術者にラポールが築けたことで、間接的に子どもも術者を信頼し上手く治療に参加してくれたこと。

代理テストによって患者のエネルギブロックや原因の特定ができることは臨床の結果からも証明されていたが、今回は子どもが症状を認識することなく母親の代理によ

るセルフイメージが成立し、潜在的に子どもの脳に学習された症状を切り替えることができることもわかった。

言語神経反射や代理テストは一見すると不思議な現象に思われがちだが、母親と子どものように深い信頼関係と密接な情報（エンルギー）のやり取りが行われている関係では、かなりの治療効果が生まれることがわかった。

この関係は母親と子どもに限らず、術者と患者にも当てはまることである。

テクニクを問わず全ての治療に言えることだが、我々は機械を構造的に直しているのではない。感情のある人間を有機的な感覚で捉え、症状の改善へのサポートをしているのである。

症状を完治させるのは最終的には患者自身の力である。だからこそ完治に向かう力を後押ししてくれる「信頼」という強力なエンルギーを味方につけ、治療効果を最大限に発揮できる関係を創り上げることが何より必要であると感じた。

治療成果が上がると、つい全てを自分の力で治したと勘違いしがちだが、その勘違いこそ信頼という最大の治療効果をブロックすることになるだろう。